

クソザコナメクジに



は 難 し い

はい、スプラッターハウス終わったしいいよ 3D を作っていきましょう。

内容

概要	3
スケルトン	3
3D 事始め	6
とにかく表示だ	6
きんのたま	6
謎の現象	7
事前知識	7
Zバッファ(深度バッファ(デプスバッファ))	8
カメラ(視点、注視点、視線ベクトル...そして上)	13
スクリーンと画角と視錐台	15
モデルを読み込んで表示	17
とりあえず読み込んで表示	17
回転します	20
移動します	20
アニメーションさせます	21
あれ?	23
ともかく動かそう	24
ちなみにループ再生についてですが	25
クソノ重い	25
非同期読み込み	26

Cube オブジェクトを作る.....	27
まずは三角ポリゴン1枚を表示してみる.....	28
用語	28
頂点情報を設定する.....	30
三角形を回転しよう.....	31
平行移動もしてみよう.....	32
法線も回転	33
三角形→四角形.....	34
四角形→立方体.....	35
アンビエントとマテリアル.....	36
転がしてみよう.....	40

概要

ぼくは正直者だから『簡単』とは言いません。言いませんが、DxLib を使っていますので、それほど難しくもないと思います。

今回参考にするゲームは Intelligent Cube...I.Q です。



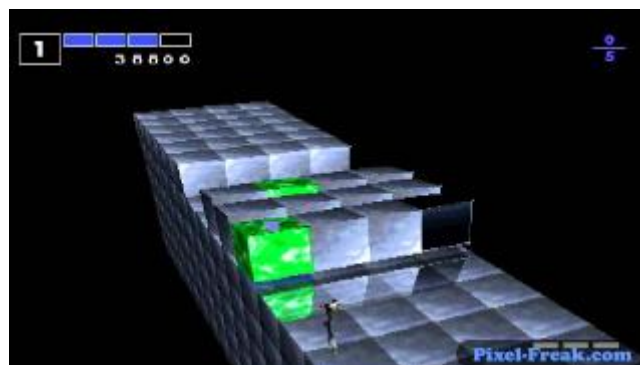
知ってる人は少ないんじゃないかな...

動画を見てみましょう。

<https://www.youtube.com/watch?v=BZM9kTGfeko>

こういうやつです。

PS1 の時代のゲームのくせにしれっと生意気にも反射とか使ったりしてなかなかの良ゲームなのですよね。



おそらく、作ること自体にそれほど時間はかからないし、スプラッターハウスが無事習得できているみんなにとっては…詰まることも少ないのではないのでしょうか？

スケルトン

まずスケルトン的なのをさっさと作りましょう。

```
#include "Game.h"
```

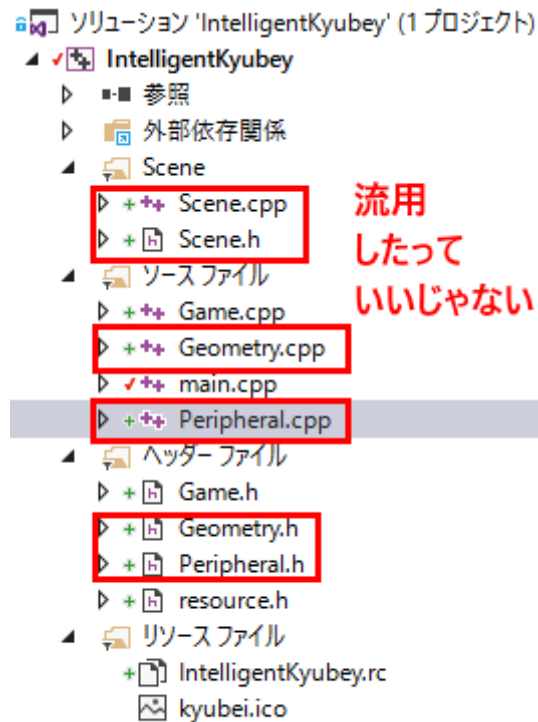
```
int main() {  
    Game& game = Game::Instance();  
    game.Initialize();  
    game.Run();  
    game.Terminate();  
}
```

エントリポイント作りの

```
class Game {  
private:  
    Game();  
    Game(const Game&);  
    void operator=(const Game&);  
public:  
    ~Game();  
  
    //インスタンスを返す  
    static Game& Instance() {  
        static Game instance;  
        return instance;  
    }  
  
    //初期化とかやるんやで  
    void Initialize();  
  
    //実際のゲームループを動かすんやで?  
    void Run();  
  
    //終了時の後処理をするんやで?  
    void Terminate();  
};
```

Game クラス作りの

その他一部(Geometry クラス,Scene クラス)はスプラッターハウスから流用しーの



トツギーノ



ひとまずここまでやってみましょう

前のプログラムを一部流用してもいいし、見ながらやってもいいし、流用しなくてもいいし、作り方を变えてもいいので、まずはタイトル画面を出しましょう。

ちなみに今回の画面サイズは 1280,720 とします。

3D 事始め

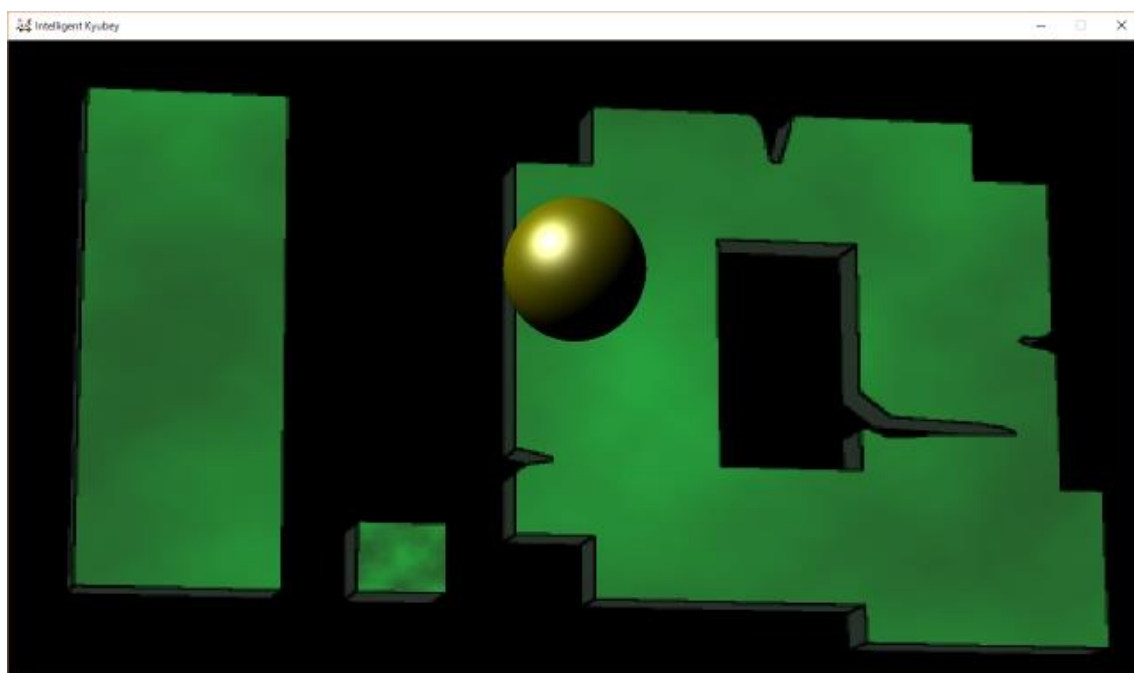
とにかく表示だ

きんのたま

とりあえず金の玉を表示してみましょう。こんな感じで記述してください。

```
DxLib::DrawExtendGraph(0, 0, wsize.w, wsize.h, _titleH, false);
```

```
DxLib::DrawSphere3D(VGet(wsize.w / 2, wsize.h / 2+100, 0), 80.0f, 36, GetColor(128, 128, 0), GetColor(255, 255, 255), true);
```



こんな感じになるかと思います。

おおー!!3D だー!!!

って、あんまり感動はしないか。大した話じゃないしね。最後の引数を true->false にすると球体がワイヤーフレーム表示になります。

ちなみに、原因は良く分からないのですが、この球体を画面中央に置くと表示が妙な事になります。

まあ、恐らくは Z バッファが無効になってるんだけど… とりあえず球体の座標を

`ysize.w / 2, ysize.h / 2, 0`

にしてみましたから試すと

謎の現象…



こうなります。

球体の下半分がおかしなことになってるのに気づきますね？

3D というのは厄介な事が多いのです。厄介な物事に対処するには事前にある程度仕組みを知っておく必要があります。

という事で、3D に必須の知識をちょっと触れておきましょう。ほんの初歩をちょっとね？
あっ…(察し)ふーん。

事前知識

3D のプログラミングをするには、例えそれが `DxLib` を使っていたとしても、言語とは別に特有の基礎知識が必要となります。大変だろう？ワクワクするだろう？基礎知識がないと↑の原因すら全く分からないのだ!!!

基礎知識があってもピンとは来ないかもしれない。だが基礎知識がなければこれに対応するのはほぼ不可能です。

というわけでいくつかの用語を解説しておきます。なおこれは多分後期でも言いますがこの Google 先生時代においては『用語』がかなりの『力』を持ちます。いわゆる『検索力』につながります。

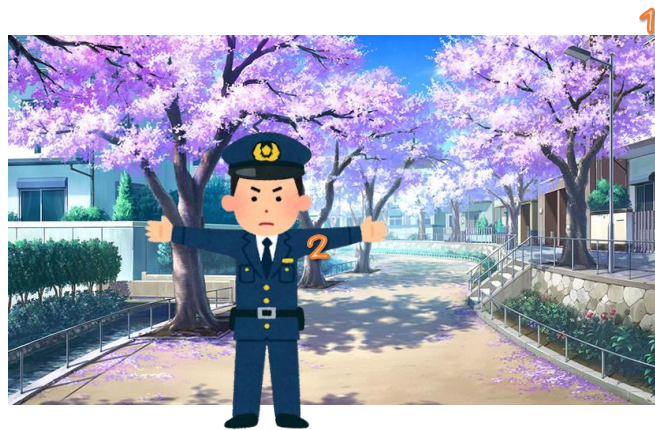
Google 先生のおかげで1から 10 までを完璧に頭に入れておく必要はなくなりましたが、迅速に答えを得るためには自分の技術に関連する『用語』はしっかり押さえとけて事だよ。

Z バッファ(深度バッファ(デプスバッファ))

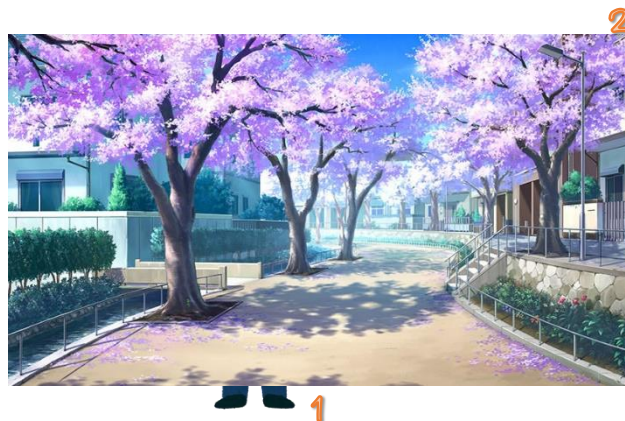
ひとまず↑の現象を解消するために必要な概念です。これを知ってないとまずさっきのを治すことはできません。

2D のゲームであっても『描画順序』が大事な事は分かりますね？

例えば

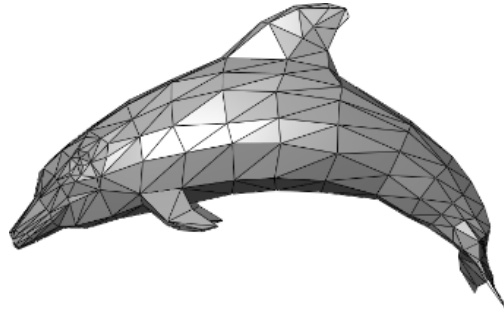


背景→警官の順番に描画すればこの場合、警官がちゃんと表示されますが、これが逆なら



こうなる。これは分かりますよね？

だから描画の順序が大切なんです。で3D モデルと言うやつは無数の三角形の集合体でできている事は何となく知っていますね？

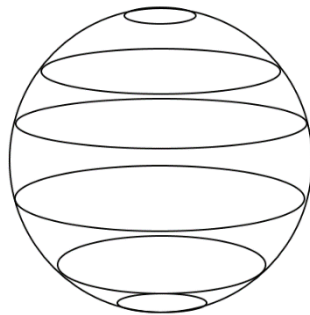


こういうやつね？

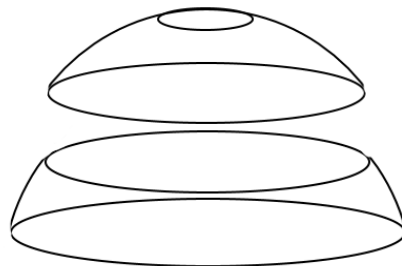
で、この三角形も前後の順序を間違えると向こう側が見えちゃったりするわけですよ。イルカくんの胃袋も心臓も肝臓も腸も見えちゃうわけですよ。

で、今回の例ではどうなってるのかと言うと、DrawSphereのポリゴンの描画順は恐らく上から下に(そして奥から手前に)書いているものと思われます。

書き方としては、



このような球体を輪切りにしたものを積み重ねて球体になっていると考えられます。



こんな感じに積み重ねているわけですね？

で、上の段を描画した後、下の段を描画したとします。そうすると、下の段の裏側が上の段の表側の後に描画されることになり、先ほどのような変な模様が出るというわけです。

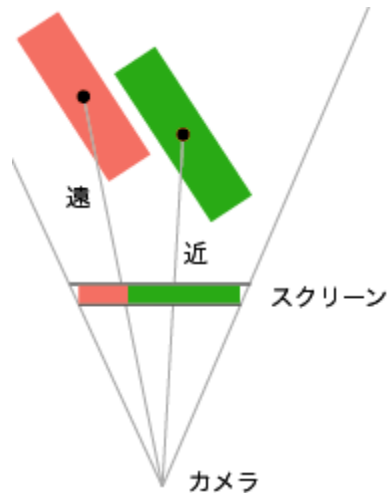


なんとなく原理は分かりましたね？3Dというのは面倒な事だらけなのです。

そこで考え出されたのが『Zソート法』というやつです。ポリゴンそれぞれのZ値(視点からの距離)を計算し、それによってポリゴンをソートするというものです。

それで向こう側にあるポリゴンから塗りつぶしを行って最後に一番手前にあるポリゴンを描画することで解決していたのです…

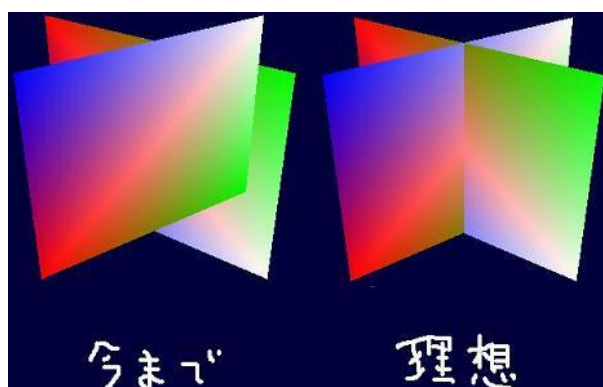
しばらくはその時代が続きました……。ただ、その当時から問題点は指摘されていて…



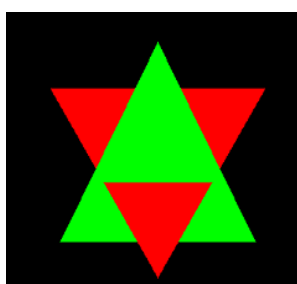
こういう位置関係だったとする。『比較されるポリゴンの座標』っていうのが、ポリゴンの頂点の座標の平均から割り出しているんで、上の図のようなおかしいことが発生します。

また、それ以外にも『突き抜け』問題があつて…

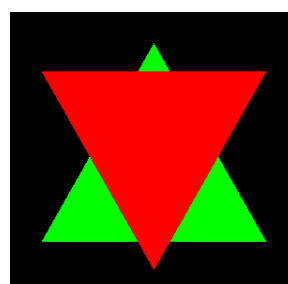
ポリゴン同士が奥行き方向にクロス、もしくは突き抜けていたりするともっとえげつない問題が発生します。



このように見た目の位置関係が全然違って見えるわけです。



理想



現実

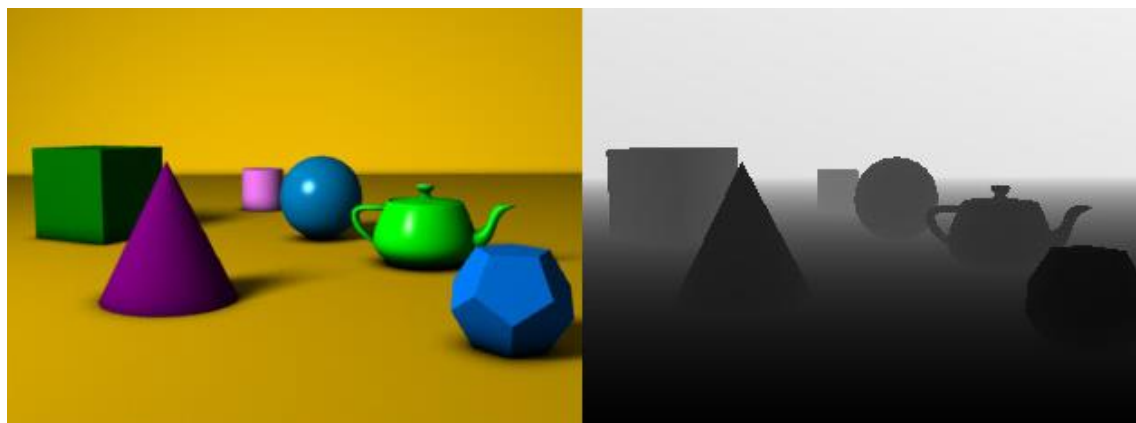
こういう事ですね。

とりあえず、こういう問題がある事は知っておいてくださいね？で、出てきた解決法が

「全ピクセル判定対象にすれば全部解決じゃね？」

という豪快な解決法であり、現在も使用されている解決法です。

やり方は簡単。Zバッファ(深度バッファ)という、『カメラからの距離を記録するバッファ』を用意します。と言っても良く分からないだろうから図で見せると…



左が実際のオブジェクト配置(=そしてレンダリングされるであろう画像)

そして、右が「Z 値(深度値)」を画像として表現したものです。正確に言うと後述する「クリッピングボリューム(視錐台)」と非常に密接に関わっているのですが、とりあえず今は

「カメラにフツノ近い」所を 0。 カメラからフツノ遠い」所を 1 とする」

というルールで Z 値が記録されていると思ってください(厳密にいうとこの理解だと不正確です)。基本的にはその事を深度値と言い、depth という値で表します。

この値を輝度としてレンダリングしたのが、さっきの画像の右側です。視点から近い方が暗く、遠い方が明るくなっているだろう？

こんなものが何の役に立つのかというと、ピクセルごとに「そのピクセルを今塗りつぶすべきか」を判断する手助けになります。

どういう事かというと、ピクセルをそのオブジェクトの色で塗りつぶすには、そのピクセルにおいて、そのオブジェクトが一番手前に(一番カメラに近く)ある必要があります。

これに関しては大丈夫ですよ？後ろにある奴の色で塗りつぶされても困りますからね。

で、どうやって行くのかというとピクセルごとの Z 値を記録していくんですが、先に記録されている側が手前で、今から記録しようとする側が奥にある…つまり Z 値が

今から塗りつぶそうとする Z 値 > 既に塗りつぶされた Z 値

であれば、描画もしないし、Z 値も更新しないわけです。

今から塗りつぶそうとする Z 値 < 既に塗りつぶされた Z 値

であれば、新しい色に塗りつぶし、Z 値も更新します。そうするとどうでしょう。座標的に手前にあるピクセルは描画され、奥にあるのは描画もされず無視されるし Z 値も書き込まれない。

結果として、最も手前にあるピクセルだけが残る

という事になります。そういう形で描画順序によらずにオブジェクトを描画する方法がZバッファ法(深度バッファ法)です。

ちなみに DxLib ではこのZバッファを有効にするフラグとZバッファに書き込むフラグがデフォルトで OFF になっています。ON するには

```
DxLib::SetUseZBuffer3D(true);  
DxLib::SetWriteZBuffer3D(true);
```

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R14N12

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R14N13

とします。基本的にはこれは両方とも true にすべきですが、場合によってはこれを OFF にしたい場合もあります。たぶん 2 年生の今の知識だけでは分からないと思いますので、現在の所は、両方 true にしておいてください。

カメラ(視点、注視点、視線ベクトル…そして上)

次にカメラの概念を話します。さっきも『カメラからの距離』なんて言い方をしましたね。カメラの座標と言うのは視点の座標であり、3D 空間上のどこかに設定します。

ぶっちゃけた話、カメラがないと 3D では物を 3D っぽく表示できません。ちよつとここで用語を言っておくと

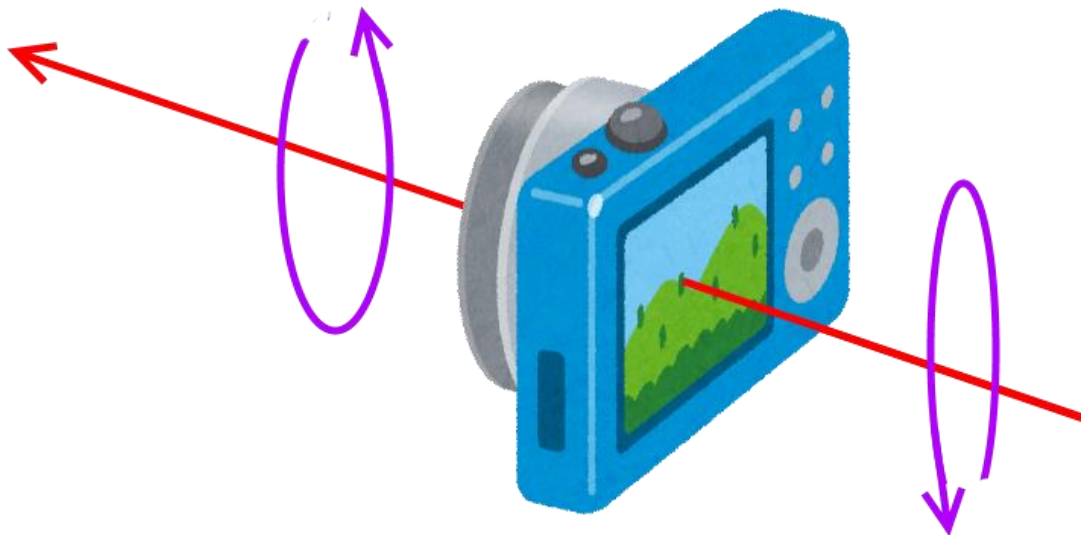


カメラは『視点』と言って、カメラが中心として写す被写体(点)を『注視点』と言います。そして、視点から注視点に向かうベクトルを『視線ベクトル』と言います。



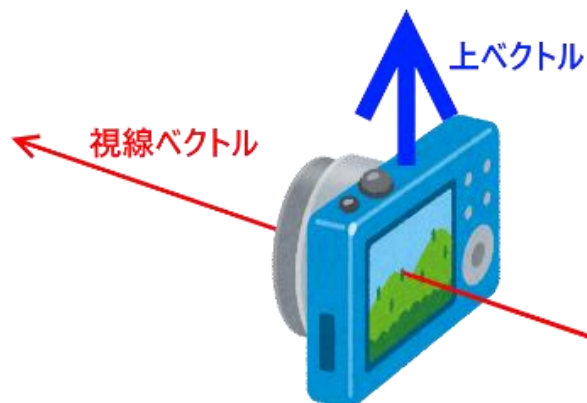
さあこの三つの概念があればカメラはOKだと思いますか？思うかもしれませんが。しれませんがちょっと待ってください。視線ベクトルだけでは不十分です。何故なら軸が一つだからです。3D空間上で軸が一つではいけないのです。

何故なら…



軸が一つでは図のようにどちらが上だか下だか定まらずに、くるんくるんくるん回転してしまうのです。重力があるとかいう事に気づきませんが、宇宙空間に放り出されたら、どちらが上も下もないでしょう？そんな状態になるのです。

これはまずいという事で必要なベクトルがアップベクトル…つまり『上』ベクトルです。



これでカメラの向きが初めて固定されます。

なお、この視線ベクトルと上ベクトルを外積してさらに外積して、カメラから見た XYZ 座標系と言うのを作って、カメラ座標系と言ったりします。

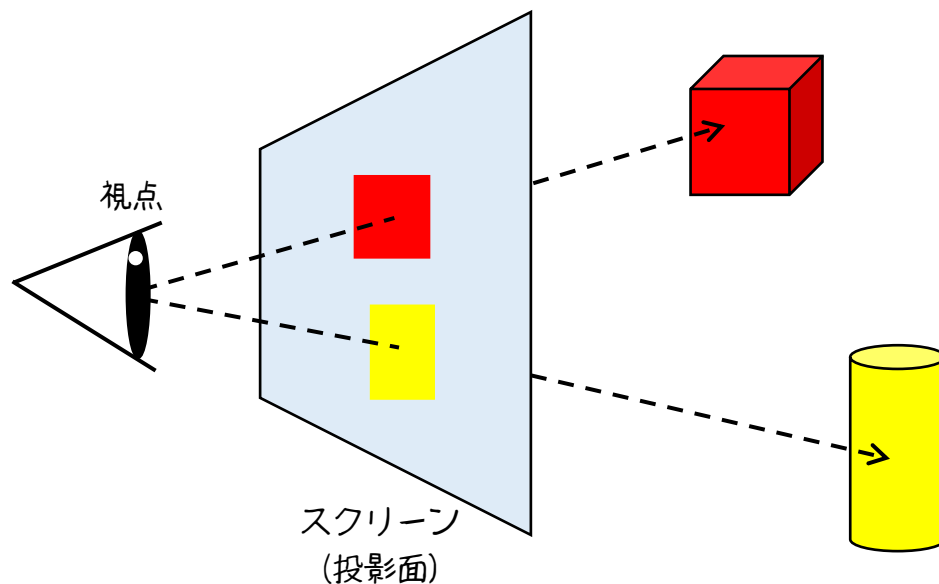
ややこしいですね…その話はとりあえず置いておいて次行きましょう。

スクリーンと画角と視錐台

ところでここで問題があります。

先ほども述べたようにカメラはあくまでも『視点』であるため、これを定義しただけでは目に映るすべての物は点に集約されてしまいます。これでは何も見えない。

というわけで視点から適度に離れた場所に『投影』したものを実際のゲームの画面に表示する必要があります。

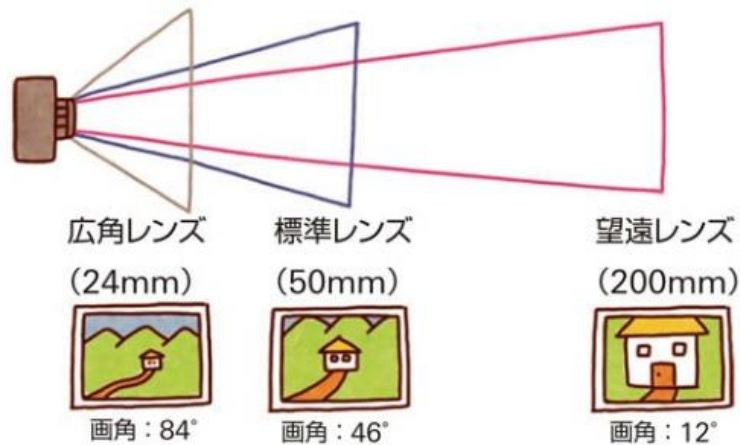


というわけで、視点とスクリーンの位置は一緒ではないのでちょっとややこしい…注意しましょう。

で、上の図で見て分かるように視線は遠くに行けば行くほど広がります。もっと見える範囲が広がっていきます。そして見える範囲が広がるという事はそれをスクリーンの範囲内に収めるためには、視界の中に入る物体の大きさは遠ければ遠いほど小さくなる必要がありますね？

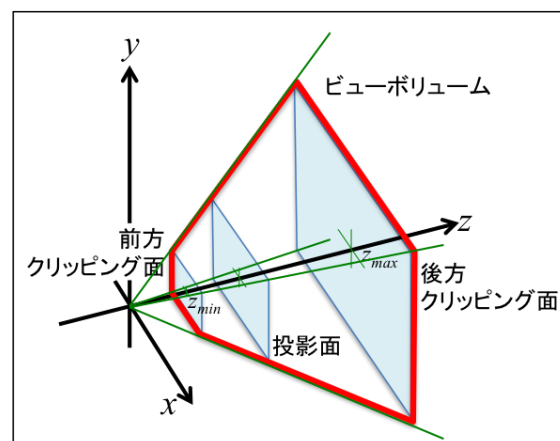
いわゆる遠近法と言うやつです。

カメラは「**画角**」と言って、見える範囲を広げるか狭めるかを角度で表します。これもまた専門用語かもしれませんが、画角が狭いと望遠レンズに。画角が広いと広角レンズになります。



広角は広い範囲を収めるために、遠くのもの極端に小さくなってしまいうため見える距離は短くなります。逆に望遠レンズは見える範囲は狭まりますが、遠くまで見えるようになります。

さて、CGの話に戻しますが、いくら望遠レンズといえども永遠の距離まで計算してはいつまで経っても計算が終わりません。という事でCGでは近い方と遠い方にレンタリングする範囲を限定します。もちろん上下左右も限定しますのでレンタリングする範囲は



立体的に図の範囲内に限定されます

この範囲の事を「**ビューボリューム**」「**クリッピングボリューム**」「**視錐台**」と言ったりします。ちなみに前方クリッピング面をニアクリップ。広報クリッピング面をファークリップと言います。near(近い)と far(遠い)ですね。

一応 3D 的な台形の形をしているので『視錐台』と呼んでいます。

とりあえず、初歩の初歩の基本中の基本の知識をお話ししました。早速ゲーム作りに励んでいきましょう。

モデルを読み込んで表示

金玉なんて表示しても面白くもなんともないので、せっかくだから可愛いモデルを読み込んで表示したいですね？

とりあえず読み込んで表示

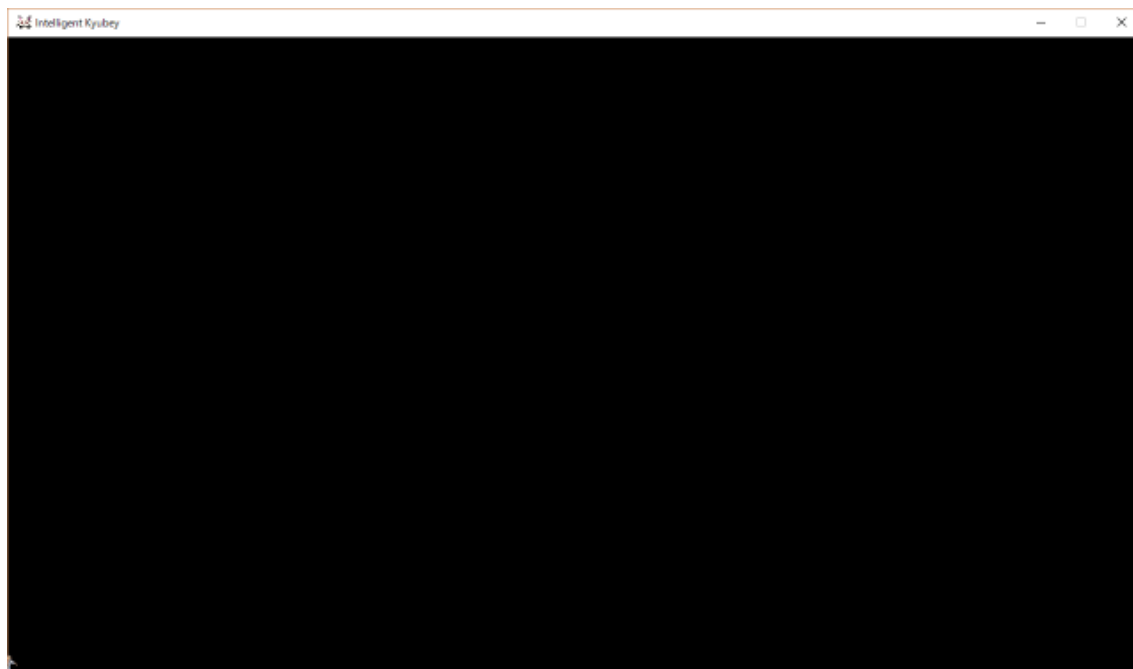
読み込むには `MV1LoadModel` という関数を使います。

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R1N1

そして表示するには `MV1DrawModel` という関数を使います。

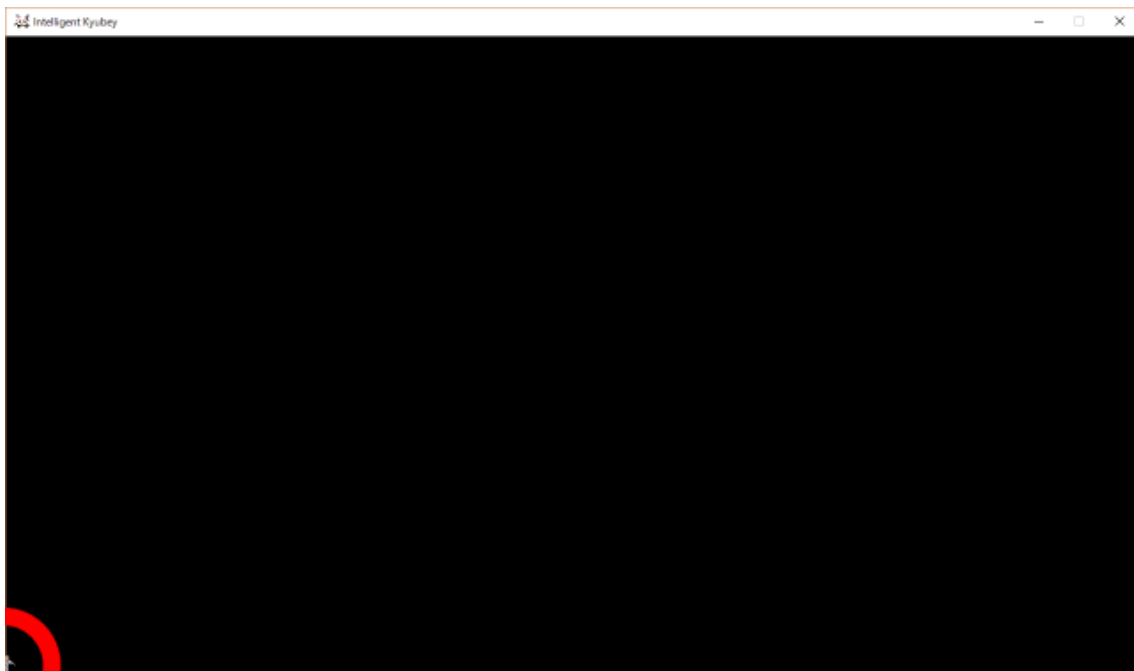
http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R2N1

これがバグなくできてればこうなります。

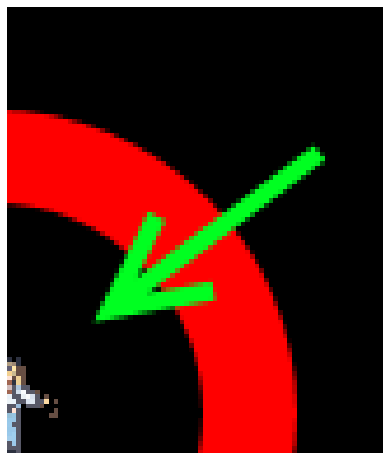


あれ？出てねーじゃん？

いやいや…よく見るがいいよ。



左下を見てください。



アッー!!

どうやら表示はされているようだ…
非常に見落としやすいので注意してください。

…そもそもどうしてデフォルトをこんなに使いづらい状況にしているのか、そこに対してはいまだに疑問が残るのだけれども…

とにかく先に原因を言っておこう。カメラだ。

カメラという概念について一応解説はしたが、DxLibは優しすぎるため、カメラのために特別な設定しなくても3Dの表示はできるようになっています。

今回もそうでしょうか？特にカメラの設定はしてませんよね？

ですがご覧のような結果になっており、ぶっちゃけ使い物にはなりません。デフォルト設定なんて所詮そんなもんです。

ちなみに本来であれば画面中央に出るべきものなのですが、何の気を遣いやがったのか左下が(0,0)になるように設定されています。というわけで、3D の一般的なカメラ設定をしましょう。

視点が(0,15,-25)

注視点が(0,10,0)

画角は 60°

ニアとファーストは…0.5~300.0 くらいにしましょうか。

カメラその他の設定は

`SetCameraPositionAndTarget_UpVecY(VECTOR Position, VECTOR Target);`

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R12N2

`SetupCamera_Perspective(float Fov)`

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R12N6

`SetCameraNearFar(float Near, float Far);`

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R12N1

で行えます。うまいこと設定できれば



モデルが表示されます。

回転します

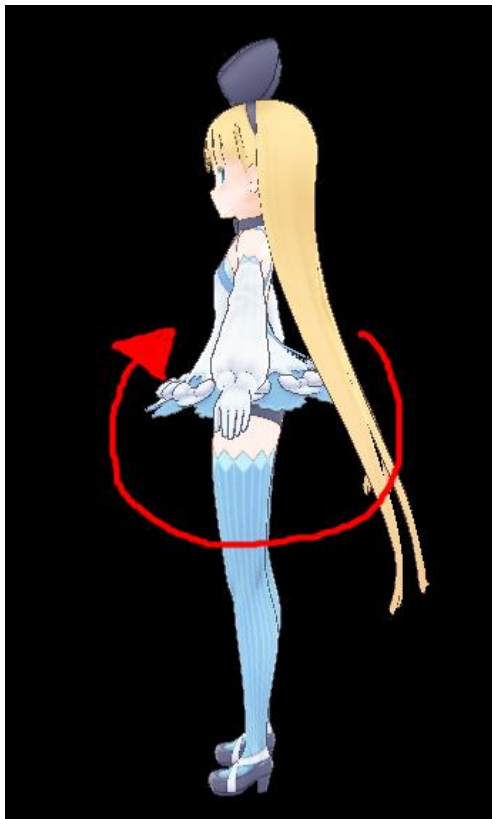
舐めまわすように眺めるために回転させます。

`MV1SetRotationXYZ`

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R3N6

この関数は軸と回転量を指定することで回転します。

あ、ちなみに VGet 関数で DxLib::VECTOR 型を作ることができます。ご利用ください。



くるくるとね

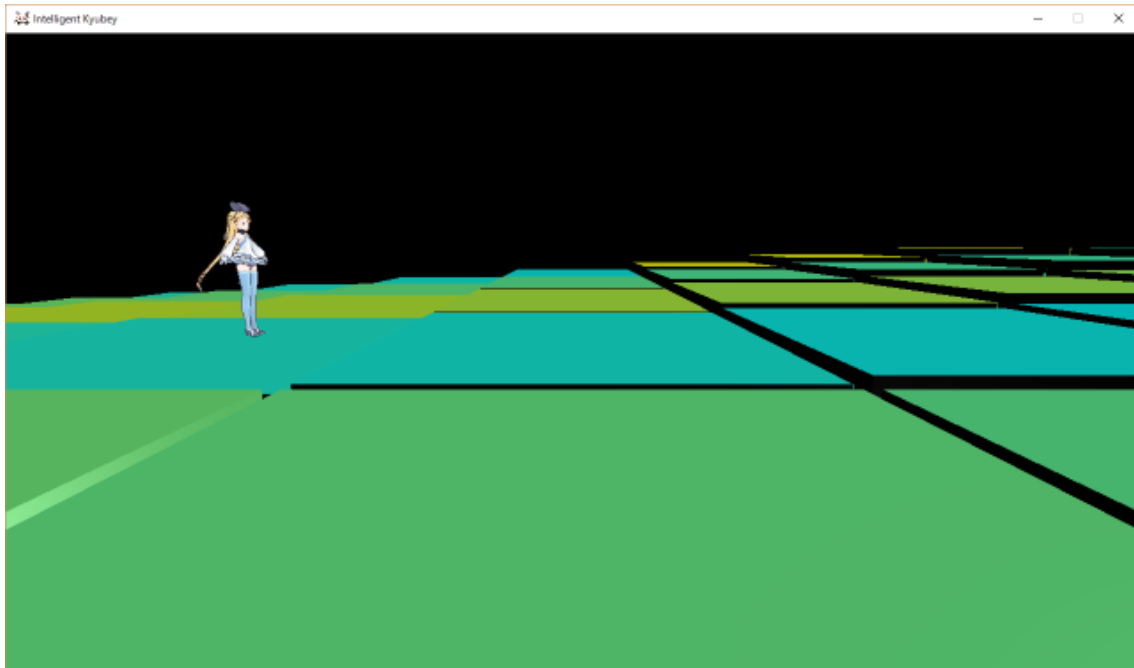
移動します

パッドの上下左右で(左右奥前)と動くように。更に言うと動いている方向に顔が向くようにして動かしてください。

ちなみに平行移動というか、座標の設定は `MV1SetPosition` という関数を使用します。

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R3N2

うまいことやれば



このように 3D 空間上をあちこち移動できます。

ちなみに地面は DrawCube3D という関数で描画してます。

していますがちょっとだけ…言っておくと、この DrawCube3D は実際のゲームにおいてはほぼ
使い物になりません。なぜかという、この立方体…回転ができません。そういう仕様です。た
ぶんデバッグ用なんじゃないかと思います。

ともかく 3D 空間上でキャラを移動させてください。

アニメーションさせます

いつまでも同じポーズでは面白くありませんね。

アニメーションさせたいと思います。

アニメーションさせるにはまず MV1LoadModel を読み直しましょう？

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R1N1

『MikuMikuDance ではトゥーン用のテクスチャ(toon01.bmp 等)はモデルファイル(pmd or pmx)が存在するテク
スチャとは別のフォルダにあって問題なく読み込むことが出来ますが、DXライブラリではトゥーン用の
テクスチャもモデルファイル(pmd or pmx)と同じフォルダに格納しておく必要があります。(トゥーン用のデフ
ォルトテクスチャは MikuMikuDance の Data フォルダの中にあります)

また、DXライブラリでは MMD のモデルファイル形式(pmd or pmx)とモーションファイル形式(vmd)の読み込みに対応していますが、モーションファイル(vmd)はモデルファイル(pmd or pmx)を読み込む際に一緒に読み込まれるようになっています。

ただ、MV1LoadModel にはモーションファイルのファイル名を渡す引数はありませんので、次のようなルールでモデルファイル(pmd or pmx)用のモーションファイルを検索します。

1.モデルファイル名に3桁の番号がついたモーションファイルがあるか検索して、あったら読み込む

(検索する番号は 000 から)

例えば、Miku.pmd(若しくは Miku.pmx) というファイル名を FileName として渡した場合は、最初に Miku000.vmd というモーションファイルが存在するか調べます。

2.検索する番号を 000 から順に1つつ増やしていき、存在しないファイル名になるまで読み込む

例えば、Miku000.vmd、Miku001.vmd、Miku002.vmd と数字の繋がった3つのモーションファイルがあった場合は3つとも読み込まれます。

仮に Miku000.vmd、Miku001.vmd、Miku005.vmd のように、番号が途切れていたら、Miku000.vmd と Miku001.vmd の二つだけ読み込まれ、Miku005.vmd は読み込まれません。

尚、読み込み時にIK計算を行いますので、x ファイルや mv1 ファイルに比べて読み込み時間が非常に長くなっています。

<ループ再生するモーションについて>

モーションの中には歩きや走りといったループさせて再生を行う用途のモーションがあると思います。

そのようなモーションの vmd ファイルは、<読み込みについて>の解説にあったファイル名の付け方にある 3桁のモーションの番号の最後に半角の L をつけてください。」

…ということです。

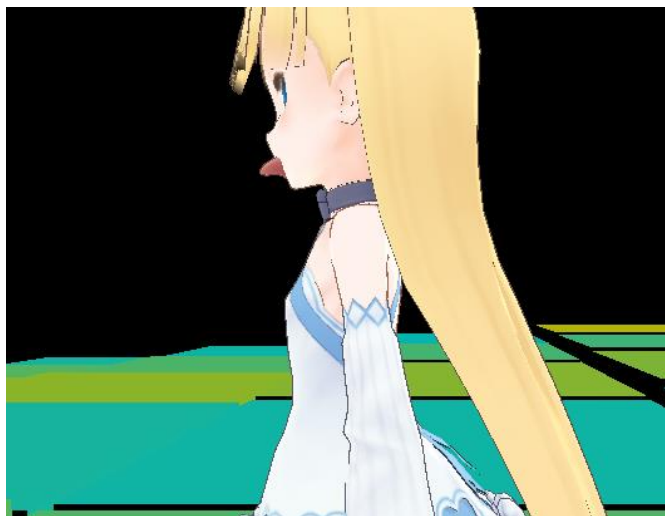
まとめて言うと

- PMD のモーションファイルは vmd という拡張子
- モデルが X.pmd であれば、モーションは X000.vmd～X999.vmd のような名前

- ループモーションは X000L.vmd のように最後に L を付ける事このくらいです。
大したことはないです。

とりあえず今回は
000L をニュートラル,001L を歩きモーションとします。

あれ？



ニコニ立体ちゃん…あれ？

非常にかわいいニコニ立体ちゃんなのですが、アニメーションさせようとする何故かベロが出ます。それはそれでかわいいのですが、ひっこめられないのでちょっと間抜けです。一応 DxLib の注意書きでも

読み込むことのできるモデルファイル形式は x,mqo,mv1,pmd(+vmd),pmx(+vmd) の4種類です。
(但し,pmx は pmd 相当の機能だけを使用していた場合のみ正常に読み込める仮対応状態です)

という事は、こういう不具合が起きても仕方ないという事が…。ちなみに僕の一番使いたいモデル『キズナアイ』は、ロードすらできませんでした…OTL。

ちょっとクソムカついたわあ……それなら、こうだ!!!



そしてこのキャラである

ともかく動かそう

動かすためにはDxLibではひとまず『アタッチ』が必要になります。アタッチとは再生したいアニメーションを指定することです。アニメーションに関しては既にモデルごと読み込んでおりますので、番号を指定するだけです。今回の『歩き』モーションは1番なので1番を指定しましょう。

```
_attach=DxLib::MV1AttachAnim(_playermodelH, 1);
```

これだけで動かないんですが、ポーズが歩きモーションのフレーム目状態になっています。

さて、これを動かしていくためには

MV1SetAttachAnimTime

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R4N3

これの第3引数の『アタッチ時間』を少しずつ進めていけば動いてくれます。1は1秒…ではなく1フレームという意味なのですが、ここがちょっと曲者で、MMDの1フレームは30分の1秒なんですよね。

通常ゲームは60fpsですが、MMDは30fpsなので、毎フレーム+1すると早すぎるのです。なので

```
_frameTime+=0.5f;
```

などのように調整してあげる必要があります。とりあえずこれでアニメーションできていれ

ばオッケーです。

ちなみにループ再生についてですが

モーションにLをつけたら勝手にループしてくれるとでも思った？

残念!!!こいつは物理演算用でしたーっ!!!

という事で、ループ対応は自前で行わなければなりません。ループ対応…ループ再生とはそもそも何ぞや？

自分でしばらく考えてみよう。

そう、最後まで進ったら最初に帰ってくるようにすればいいんですね？そして最終フレームと言うのも自動で判断してくれるわけではないっぽいです。じゃあどうするのかというと『縦再生時間』を得る関数

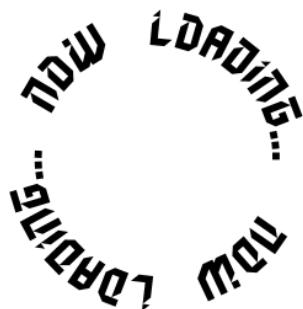
```
float MV1GetAttachAnimTotalTime( int MHandle, int AttachIndex );
```

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R4N5

を使用して『縦再生時間』を取得。これを越えたら_frameTime を 0 に戻すような処理を行えばループになるというわけです。

クッソ重い…

モデル自体は大した重さではないのですが、IK のベイクがそれなりに時間がかかってる…ので、読み込みが重いんですよね…。というわけで NOWLOADING を出しましょう。



ロード画面の例

ちなみにこの重さは単純に IK 計算の重さなので、Release にするとちよつとは改善されると思います。

また、この NOWLOADING はローディング中はくるくると回るようにしましょう。一応コンシュー

マゲームの制作のチェックリスト項目のひとつに

「処理は1フシたりとも止めてはいけなし」

というのがあったりします。無茶言うな。流石にこいつは努力目標ではあるんですが、各プラットフォームでほぼ共通の明確なルールがあって

「1秒以上、画面更新が止まっていけなし」

というのがあります。これはゲームセンター時代からそうなのですが、1秒以上画面の更新が行われないと、ハードウェアとかドライバとかいうのが『あっ、これ故障だ』と見なしてシャットダウンしちゃうんですよ。これをウォッチドッグというのですが、面倒な仕様なのです。なので、画面を止めないようにしたいと思います。

非同期読み込み

DxLib ではこれは簡単で…

```
SetUseAsyncLoadFlag(true);
```

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_other.html#R21N1

SetUseAsyncLoadFlag を true にすると非同期読み込みになります。3D でも同様です。関数自体は即時復帰ですが、読み込みが終わり次第描画されます。

ただし、読み込み中はアタッチも何も、メッシュに対する操作を受け付けないので、モデルロード処理が終わってからアニメーション適用をしなければならないわけです。

つまり終わるタイミングを知りたい。読み込み終了タイミングを知るには

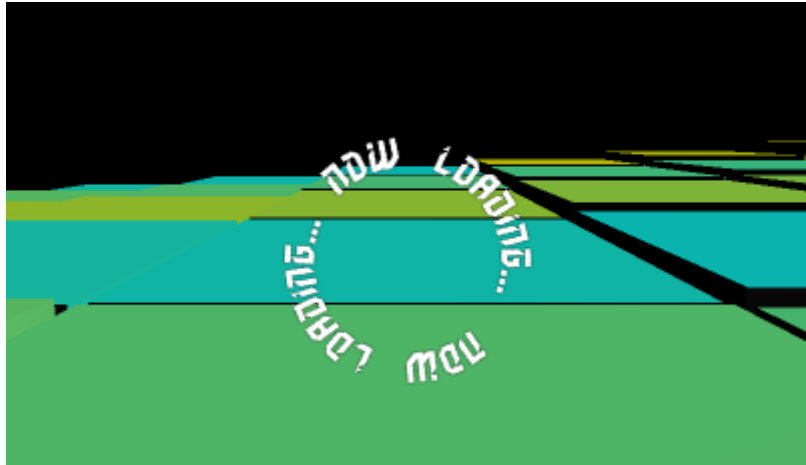
[CheckHandleAsyncLoad](#)

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_other.html#R21N2

を使用するといいでしょ。

引数にハンドルを渡して関数をコールすると、現在のロードスレッドの対象となるモデルが読み込み完了したら true。まだなら読み続ける…そして読み続けている間は NOWLOADING を表示する。

という具合で良いと思います。うまい事行けば、ロードするまでローディング画面が表示されているという状態になります。



コツと言うか、手順としては、ゲームシーン開始の時点で非同期読み込みを開始して、ローディングアイコンを回転させつつフェードイン。読み込みが終わらなければローディング画面のまま。終わればメインのアップデート(状態)に切り替えてモデル表示。

この切り替えるタイミングで、アタッチを行えばうまくいくと思います。

Cube オブジェクトを作る

現在表示している Cube は DrawCube3D で描画しているのですが、こいつは回転もできないし IQ に使うには力不足である。

で、外部から立方体を読み込んでもいいのだが色分けとかはプログラマブルにできた方がいいと思いますし、頂点情報を作るのもまあいい勉強だと思いますので、三角形の集合体として Cube クラスを作っていきます。

```
#pragma once
class Cube
{
public:
    Cube();
    ~Cube();
    void Update();
    void Draw();
};
```

まずは三角ポリゴン1枚を表示してみる

現在の所 DirectX だろうが OpenGL だろうが 3D の物体は全て三角形の集合体として表現されます。

そういうわけで三角ポリゴンを1枚表示するところからやってみましょう。

当然ながら3つの頂点情報が必要です。描画を行うには

DrawPolygon3D

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R14N7

という関数を使用します。実はこれはのちに DrawPolygonIndexed3D にする予定なのですが、ちょっと概念がややこしいので、まずは三角形を表示しましょう。

マニュアルによれば頂点情報は VERTEX3D という構造体であり

// 3D描画に使用する頂点データ型

```
struct VERTEX3D
```

```
{
```

```
    // 座標
```

```
    VECTOR pos ; //12bytes
```

```
    // 法線
```

```
    VECTOR norm ; //12bytes
```

```
    // ディフューズカラー
```

```
    COLOR_U8 dif ; //4bytes
```

```
    // スペキュラカラー
```

```
    COLOR_U8 spc ; //4bytes
```

```
    // テクスチャ座標
```

```
    float u, v ; //8bytes
```

```
    // サブテクスチャ座標
```

```
    float su, sv ; //8bytes
```

```
};
```

という定義がされています。非常に情報量が多いですね。なのでぶっちゃけ頂点数は少ない方がいい。1 頂点当たり 48 バイトですね。たいていのフォーマットはこれ以上なのでしゃあないと思いますわ。

用語

またけったいな用語が出てきたのに気づいておりますでしょうか？

まず法線…ここでは法線ベクトルの事ですが、聞いたことくらいはあると思いますが、

法線ベクトル⇔面に垂直なベクトル

の事です。

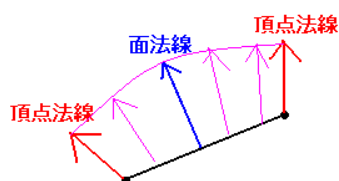
あれ？面に垂直なのになんで頂点情報なの？と思った人もいるかもしれませんが、基本的に法線情報ってのは頂点が持っています。本来は『面』であるのは確かに正しいのですが、スムーズシェーディングと言って、面にグラデーションをかけて滑らかにするには頂点にあった方が都合が良いのです。



面法線



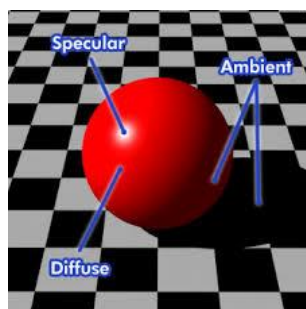
頂点法線



ただ、今回のように立方体を作るときはちょっと不向きなのですが…まあ、全モデルのうち角ばってる方が少ないんじゃないかなと思うので、現状では頂点法線が採用されてると思ってください。

あ、この法線ベクトルが何に使用されるのかと言うと、物体表面の明るさを決めるのに使用されています。おおざっぱに言うと、法線ベクトルと光線ベクトルの内積が明るさに対応していると思ってください。なので、何はなくとも内積は復習しておくように!!!

次にディフューズ(拡散反射成分)とスペキュラー(鏡面反射成分)ですが、こいつらは先ほどの明るさにかける係数みたいに思っておいてください。なお、ディフューズはぼやとした明るさの変化で、スペキュラーはキュンとした明るさの変化に対応します。



なお、↑の図にはスペキュラとディフューズに加えて、アンビエント(環境光)というのがありますが、こいつはスペキュラ&ディフューズのみだと真っ暗(真っ黒)になってしまうので、下駄を履かせる意味でついていると思ってください。

古典的なシェーディングの式ではこのディフューズ、スペキュラー、アンビエントが物体の明るさを決める三大要素になっています。

次の『テクスチャ』はお判りでしょうが、UV って何でしょうね？UV ってのはテクスチャをポリゴンに張り付けるための目印となる数値です。頂点と絵のどこを対応させるのかと言うのを 2D 座標で設定する…そういうものです。DxLib の説明だと

『頂点のテクスチャ座標です。画像の左上端を $u=0.0f$ $v=0.0f$ 右下端を $u=1.0f$ $v=1.0f$ とした座標で指定します。』だそうです。

最後のサブテクスチャは今の所使用しないそうですので、無視してください。

ちなみにテクスチャについて、DxLib における注意点を一つ…

『GrHandle で指定する画像は 8 以上の 2 の n 乗のピクセルサイズ(8, 16, 32, 64, 128, 256, 512, 1024 …)である必要があり(使える画像サイズの限界はハードウェアが扱えるサイズの限界ですので、2048 以上のピクセルサイズは避けた方が良いでしょう)』

だそうです…マジか。3D めんどくせーな。

頂点情報を設定する

で、頂点情報を設定しようとして気づいたのですが、うーん。DxLib の『モデル以外の回転』とかって、面倒…というか、CPU 側でやるんだね…GPU 側にやらせたければシェータ書かなきゃいけないんだね。シェータは 2 年生にはまだ早い気がするし…うーん。

いやさ、DX9 とかだったらシェータ使わなくても頂点に対して SetWorldMatrix 的な関数で回転行列投げてやれば GPU 側で回転してたんだけど、DxLib はモデルに対してしかそういう機能を公開していないっぽい…仕方ないなあ…CPU 側でやるか。

どうやら VTransform で各頂点を動かせという事らしい。掲示板における DxLib の管理人のサンプルコードを見ると…

// 行列を使ってワールド座標を算出

```
Vertex[ 0 ].pos = VTransform( VGet( -100.0f, 100.0f, 0.0f ), TransformMatrix );
```

```
Vertex[ 1 ].pos = VTransform( VGet( 100.0f, 100.0f, 0.0f ), TransformMatrix );
```

```
Vertex[ 2 ].pos = VTransform( VGet( -100.0f, -100.0f, 0.0f ), TransformMatrix );  
Vertex[ 3 ].pos = VTransform( VGet( 100.0f, -100.0f, 0.0f ), TransformMatrix );
```

<http://dxmlib.o.oo7.jp/cgi/patiobbs/patio.cgi?mode=past&no=2749>

マジか…クソめんどー。正直嫌すぎるとしか…。

まあ文句言っても仕方ないので…やろう!!!

頂点の情報は

頂点座標、法線、ディフューズ色、スペキュラ色、UV、ゴミ

となっておりますので、三角形を作るならば

```
VERTEX3D v(3) = {  
    { VGet(0,10,0),VGet(0,0,-1),GetColorU8(255,255,255,255),GetColorU8(255,255,255,255),0.0f,0.0f,0.0f,0.0f },  
    { VGet(2,10-4,0),VGet(0,0,-1),GetColorU8(255,255,255,255),GetColorU8(255,255,255,255),1.0f,0.0f,0.0f,0.0f },  
    { VGet(-2,10-4,0),VGet(0,0,-1),GetColorU8(255,255,255,255),GetColorU8(255,255,255,255),1.0f,1.0f,0.0f,0.0f } };
```

のように3頂点を定義して

```
void  
Cube::Draw() {  
    DxLib::DrawPolygon3D(v, 1, gH, false);  
}
```

のようにドローします。うまくいけば…



うまいこと三角形が表示されます

三角形を回転しよう

はい、三角形を回転させてみます。Y軸回転させてみましょう。

ちなみに `MV1SetRotationXYZ` はモデルに対しての関数なので使えません(MV1と先頭につい

ている関数はモデルに対しての関数だと思ってください)

それなら、どうやって回転させるのか？

それはですね…すべての頂点の座標を回転させるのです。回転には行列を用いる必要があります。

回転行列を返す関数は色々ありますが、今回はY軸回転をさせましょう。関数は

```
MATRIX MGetRotY( float YAxisRotate );
```

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R11N18

です。

で、MATRIX ってのが行列です。これで取得した MATRIX 型の行列を VTransform で頂点に適用します。

```
VECTOR VTransform( VECTOR InV, MATRIX InM );
```

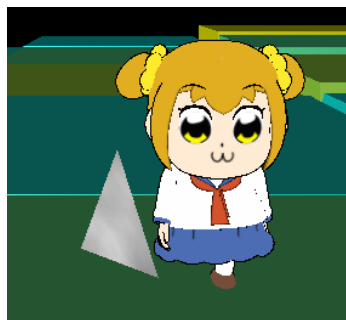
http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R11N12

つまり

```
v=VTransform( inv,MGetRotY(angle));
```

これで回転後の頂点座標が得られますので、この回転後の頂点情報を DrawPolygon3D に放り込んであげればいいのです。

そうすれば



このように三角ポリゴンも回転します

平行移動もしてみよう

画面中心から少しずらした状態で平行移動をしてみましょう。回転はそのまま続けつつ。

平行移動の関数は MGetTranslate

さて、平行移動と回転と…2つ組み合わせるにはどうすればいいのでしょうか？

数学の時間にやったはずなのですが…分かりますか？

そう…行列同士を乗算するんですよね。ちなみに DxLib では行列の*オペレータは搭載されておきませんので MMult 関数を使用してください。行列同士の乗算を表します。

MGetTranslate

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R11N16

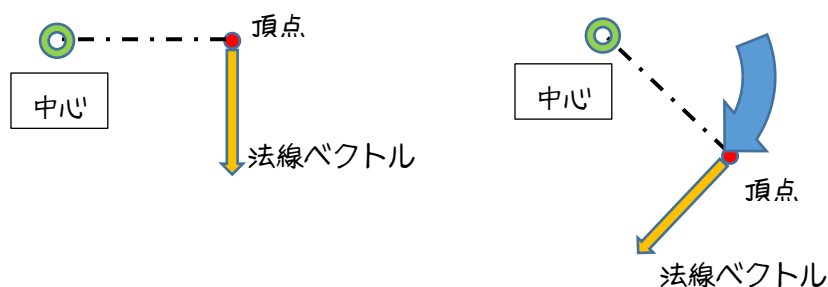
MMult

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R11N25

うまくいけば、中心から離れた場所で回転します。うまくいっている人は試しに MMult 関数の 2つの引数を入れ替えて挙動の違いを確認してください。数学の時間に『行列は乗算の順序を間違えないようにしようね』と言った意味が分かります。

法線も回転

実は 3D 的に陰影をつけるのであれば、頂点が回転した時に法線も一緒に回転しないと不自然な事になりますので、法線も回転する必要があります。



ただし、法線には平行移動成分をかけてはいけません。平行移動成分を抜くには 4x4 行列のうち、左上から 3x3 行列だけをかけてやればよく、そのための関数も用意されており

VTransformSR

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R11N13

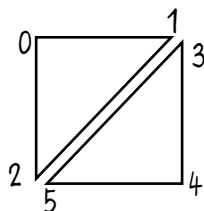
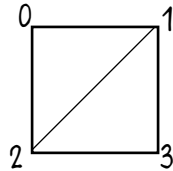
です。その結果



こんな風に明暗がついていれば OK です

三角形→四角形

三角形を四角形にします。ただし、ここで DrawIndexedPolygon3D に切り替えます。何故かと言うと本来



このように4頂点で済むはずの情報が実際には6頂点情報となってしまう、データの無駄だからです。こうすると、4頂点情報+インデックス情報6つで、一見情報が増えているようですが、1頂点当たり48バイトなので $6 \times 48 > 4 \times 48 + 6 \times 4$ となります(288>216)。数が増えれば増えるほどこれは顕著です。

ちなみにインデックスデータは配列のインデックス(添え字)情報で三角形ができていくように並べていきます。↑の例で言うと

{0,1,2,1,3,2}というわけです。一応のルールとして回り方向(右回り、左回り)は統一しておいた方がいいので、こうしています。

例えば

```
const float ed_w = 5.0f;
```

```
VERTEX3D inv(4) = {  
    { VGet(-ed_w, ed_w, -ed_w), VGet(0, 0, -  
1), GetColorU8(255, 255, 255, 255), GetColorU8(255, 255, 255, 255), 0.0f, 0.0f, 0.0f, 0.0f },  
    { VGet(ed_w, ed_w, -ed_w), VGet(0, 0, -  
1), GetColorU8(255, 255, 255, 255), GetColorU8(255, 255, 255, 255), 1.0f, 0.0f, 0.0f, 0.0f },  
    { VGet(-ed_w, -ed_w, -ed_w), VGet(0, 0, -  
1), GetColorU8(255, 255, 255, 255), GetColorU8(255, 255, 255, 255), 0.0f, 1.0f, 0.0f, 0.0f },  
    { VGet(ed_w, -ed_w, -ed_w), VGet(0, 0, -1), GetColorU8(255, 255, 255, 255),  
GetColorU8(255, 255, 255, 255), 1.0f, 1.0f, 0.0f, 0.0f } };
```

```
unsigned short indices[6] = { 0,1,2,1,3,2 };
```

こんな感じに頂点とインデックスを定義しておき

```
DxLib::DrawPolygonIndexed3D(v, 4, indices, 2, gH, false);
```

こんな感じで描画すれば…



このように正方形が表示できることでしょう

ここまできたらより 3D らしく、立方体を作っていきます。

四角形→立方体

さて、ここからは自分で考えて立方体を作ってください。なあと…立方体は 6 面だから同じものを向きを変えて 6 面つくればいいだけです。

- 点の数は 24 個(6x4)
- インデックスの数は 36 個(6x6)

これがヒントです。頑張って作ってみてください。

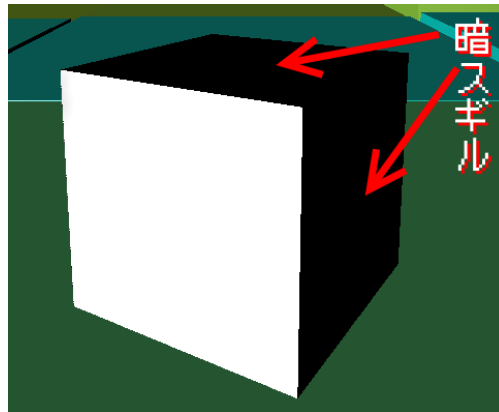
ひとまずこうなれば…



やり方は問いません

アンビエントとマテリアル

こ↑こ↓まで来てみるとある程度 3D の事が分かってきたかなと思いますがちょっと気に入らない部分があります。



そう、暗い部分が暗すぎるのです。マックロクロスケなのですわー。
こういう時に明るさの下駄を履かせるのがアンビエント(環境光)成分なのですが、

```
SetLightAmbColor(GetColorF(1.0f, 0.0f, 0.0f, 1.0f));  
SetGlobalAmbientLight(GetColorF(1.0f, 1.0f, 0.0f, 1.0f));
```

こんな風にも書いても真っ暗なんです…何故？何故ッソヨー!!!モルゲッソヨー!!
と思ってリファレンスを見ました

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R13N45

こう書いてます。

『逆に、この値を何にしてもマテリアルのアンビエントカラーが真っ黒
だとなにも見た目は変わりません。』

マジすか。初心者向けのようない…そうでない…ような？

ということでマテリアルとは何でしょうか？これは日本語で言うと『表面材質』の事です。
『表面の色』『ざらざら』『つるつる』とかそういうやつ。

先ほどライティングの設定をやりましたが、本来、僕らの目に物の色やら物の形やらが見える
のは、僕らの目に『ライト』から放射された『光』が『物体表面』に『反射』して、その『反射した
光』が『僕らの目』に入ることによって、例えば『赤い本』等と言うものが認識できるようになっ

ています。



で、古典的なマテリアルは、光の種類それぞれに対応するように設定ができています。ところでまだマテリアルってのを設定してないんですが、通常はモデルそのものに定義されています。

ですが今回はプロシージャルに作った立方体。確かにマテリアルは無いですね…ということで適切な関数はないですかねえ…

http://dxlib.o.oo7.jp/function/dxfunc_3d.html#R14N11

その名も SetMaterialParam ですね。

アンビエントはそれほど強くないと思います。大体スペキュラは真っ白、ディフューズは背景の色に合わせる(今回は背景黒だけど、まあ白灰色くらいで)。で、アンビエントはあくまでも『真っ暗にならない』ための措置なので、黒に近い灰色でいいと思います。

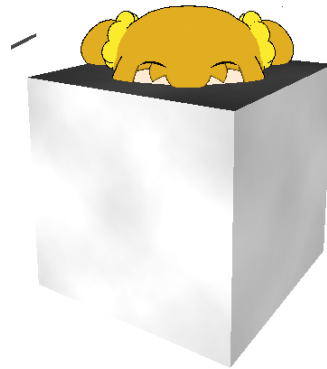
また、Power というのがありますが、これを 0 にしないでください。

```
MATERIALPARAM mp = MATERIALPARAM();  
mp.Ambient = GetColorF(0.2f, 0.2f, 0.2f, 1.f);  
mp.Diffuse = GetColorF(0.75f, 0.75f, 0.75f, 1.f);  
mp.Specular = GetColorF(1.f, 1.f, 1.f, 1.f);  
mp.Emissive = GetColorF(0.2f, 0.2f, 0.2f, 1.0f);  
mp.Power = 10.0f;
```

こういう感じで設定すると



これでなんとなくアンビエントがついたのが…わかるだろう？あと、さっき Power は 0 に写ちゃダメって言いましたが、何故か分かりますか？何故か？



DrawCube は真っ白に。自分で作った頂点は上部が真っ黒に…
良く分からないかもしれないので、スペキュラの計算方法について説明しよう。スペキュラと言うのは鏡面反射による明るさの決定の事。

通常であればきちんと反射ベクトルを計算するのだが、DxLib では簡単にするために『ハーフベクトル』と言うのを用意します。

ちなみに反射ベクトルの計算方法は覚えていますか？覚えていますよね？

$$R = I - 2N(N \cdot L)$$

って感じで求めてました。覚えていますか？で、スペキュラの明るさって奴は、これと視線のベクトルの内積 $\rightarrow \cos \theta$ を求めて、さらにさらに乗数を乗算してやることによって、スペキュラの明るさを決定しています。

$$\text{明るさ} = k(R \cdot E)^n$$

さて、この簡易版がハーフベクトルによるスペキュラ計算だ。DX9 の時はよく使用されていたようだけど、今って使われてるのかな？

ともかく理屈はこうです。

ハーフベクトルを作る

$$H = (L + E)$$

H を正規化する

法線ベクトルと内積

$$H \cdot N$$

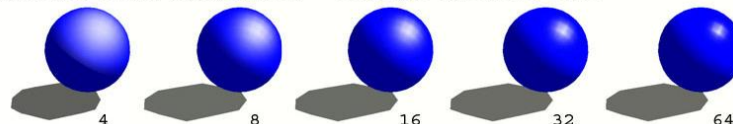
合わせて書くところ

$$(L + E) \cdot N$$

おわり。確かにシンプルですね。ちなみに、ライトベクトルと視線ベクトルからハーフベクトルを作っていますが、理屈はお分かりですか？ベクトルの足し算は平行四辺形状態になるので、足し算結果ベクトルは二つのベクトルの真ん中にあります。どうせ正規化するんだから方向だけ真ん中であればいいという事。

で、恐らくこのハーフベクトルからのスペキュラ計算なんですが、スペキュラと言うのは、このベクトルの内積に対して power つまり〇〇乗したものが明るさとなります。普通に考えたらむっちゃ明るくなりそうですね？でもよく考えてください。正規化済みのベクトルの内積なんて、最大値が 1.0f ですよ？つまり、明るくなるどころか暗くなります。

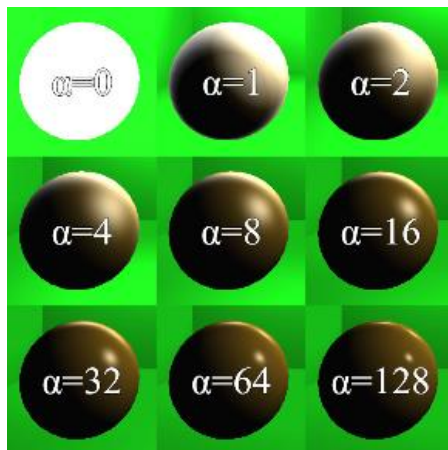
SPECULAR POWER (Irradiance) - constant intensity 0.25



ご覧のように値を上げれば上げるほど白い部分が小さくなります。

この値を上げれば上げるほど、金属感が出てきます。

さて、これを 0 にするとどうなるでしょうか…そう。常に 1 になります。つまり全てが真っ白になっちゃうんですね。気をつけましょう。



転がしてみよう